

1920 年代初頭のロシアにおける飢饉と 乳幼児の生存・養育環境

村 知 稔 三

〔キーワード〕 子ども生活史, 飢餓, ヨーロッパ=ロシア部, 1912~1922年

「僕らは死にかけている。人々は行き倒れ、家は閉められ、作物はみな枯れて、食べ物もなく、僕らは取り残された。僕らの嘆きを聞いてくれるのは誰？ 悲しみを受けとめてくれるのは誰？ 苦しみをわかってくれるのは誰？ あなたはどう？」（浮浪児を収容した児童ホームで 1921 年に流行した歌¹⁾）。

はじめに

本稿は、近現代ロシアにおける乳幼児の生活史研究の一環として、その出生と生存、養育と保育のあり方に大きく影響した 1921~1922 年の飢饉について考える。

飢餓や飢饉は現在の日本人には遠い世界のことと感じられがちである。だが、第二次世界大戦直後の事態を思い出すまでもなく、飢餓の恐怖は日本列島の住民にとり長いあいだ日常的なものであった。しかも、その恐怖から脱しかけた 1961 年に 76% だった穀物自給率は、2005 年に 28%（推計値）まで低下しており、世界とりわけ米国や中国などの情勢²⁾で食糧不足の状態に再び陥る危険性が潜んでいる³⁾。

飢饉時にその直接の最大の影響を受ける存在のひとつが乳幼児である。1920 年代初頭に、ロシアのヨーロッパ部（欧露部）の中央を流れるヴォルガ川の沿岸を中心に発生した飢饉の際も、少なくとも 100 万人ほどの死者のなかに相当数の乳幼児が含まれていた。

従来のロシア保育史研究はこの飢饉についてあまり論じてこなかった。同時

代の文献をみると、モスクワの保育活動を概観した1927年の論文が「飢饉のために保育をめぐる事態は破局を迎え、親は保育者を信頼しなくなった」と述べ⁴⁾、1928年刊の保育者向けの便覧が「戦争・崩壊・飢饉の連続で幼児の身体形成がとくに心配な状態にある」という教育人民委員部（文部省に相当）の1924年の決定を収めている程度である。この状況は、1991年のソ連崩壊後にロシアや米国で公表された保育関係の学位請求論文でもあまり変わらない。⁶⁾日本のロシア教育史研究では1931年の英語文献を紹介した1980年の福田論文や、飢饉などによって生まれた浮浪児の教育について論じた1987年の桑原論文⁷⁾がある。だが、先駆的な前者は、福田がいうように、大雑把な叙述に留まっており、後者は飢饉下の子どもの実態を主題としていない。

視野をロシア史研究全般に広げると、以上とは異なる状況がみえてくる。1917年の（十月）革命とその直後の内戦（対ソ干渉戦争）により、いわば世界の目を釘づけにしていたロシアで生じた飢饉だけに、同時代人による記録がロシアの内外で残されている。⁸⁾こうした公刊資料を駆使した1970年の米国の学位請求論文はこの飢饉の全体像を再現しようとした。⁹⁾ただし、そこでは冷戦下の敵国研究という意識が強いためか、飢饉の規模を大きめに推計する傾向がめだつ。スターリン体制の成立した1930年代以降は隠されがちだった1920年代初頭の飢饉に関する未公刊の資料がソ連崩壊前後より公開され始めた。それにもとづいて、旧ソ連の研究者らがいち早く成果を公表したり、米国の歴史家ボールが飢饉時に大量に生まれた浮浪児について論じたり、豪州の歴史人口学者ウィートクロフトが飢饉時の栄養摂取量の変化を詳述したり、内戦期研究者の梶川が飢饉に関する未定稿を著わしたりしている。¹⁰⁾ただし、これらの著作は飢饉全般を論じるものであり、乳幼児の問題に多くのページを割いていない。

このように、1920年代初頭の飢饉時における乳幼児の状態の解明は、ロシア・英語圏・日本などの研究において基本的に未解明の課題として残されている。

なお、ロシアにおける最新の研究動向として注目すべきは、1998年に刊行が始まった『社会史年報』の第4号に、今回の飢饉と子どもの関係を論じた2

つの論文が掲載されていることである。¹¹⁾とくに、飢饉開始期とほぼ重なる1921年2月に、ロシア共和国の最高権力機関である全ロシア中央執行委員会に付設され、飢餓児童の救済に一定の役割を果たした児童生活改善委員会(Комиссия по улучшению жизни детей, 通称「子ども委員会」)の活動を論じたスミルノヴァ論文は、乳幼児を含む子どもを対象に、飢饉下のその実態について詳述しており、有益である。

あらかじめ断っておくべき本稿の制約は、第1に、今回の飢饉の全体像を少ない紙幅で描こうとしているため、飢饉の程度が地域ごとに異なり、乳幼児の生存や養育に与える飢饉の影響が彼の属する民族や宗教・階級・階層などに媒介される点を描写できていないことである。第2に、近年の飢饉研究で重要な前提とされるA.K. セン(1998年のノーベル経済学賞の受賞者)の権原(entitlement)理論——飢餓とは食糧などの財・サービスを用いて達成される「十分な栄養を得る」という基礎的潜在能力が剥奪された状況である——を踏まえておらず、彼が批判する「食糧供給量の減少ゆえに飢饉が生じる」という常識的なFood Availability Declineアプローチに立っている点である。¹²⁾

以下、第1節では、1920年代初頭の飢饉をロシアの飢饉史上に位置づけ、その原因や規模などを概観する。第2節では、乳幼児への飢饉の影響を軽減するために行なわれた配給・給食・疎開の実際や、通園型の保育施設と収容(生活)型の児童ホームの実態にふれる。

1 ロシアの飢饉史と1920年代初頭の飢饉の特徴

(1) 飢饉の歴史と一般的要因

9世紀後半に国家的形態をとり始めたロシアで最初の飢饉は1024年のものとされている。それから19世紀前半までに130回の飢饉が記録されているので、約6年に1回の割合で飢饉が生じたことになる。その後も飢饉は頻発した。主なものをあげると、1867～1868年、1872～1873年、1877年、1884年、1891～1892年、1897～1899年、1901年、1905～1907年、1911～1912年、1915年、1921～1922年、1932～1933年、1946～1947年の飢饉である。

(180)

その規模は概して大きく、1891 年以降の飢饉の大半が 100 万人以上の住民を飢餓に直面させた。とりわけ 1920 年代初頭以降の 3 度の飢饉は大規模だった。

ロシアで大飢饉が頻繁にみられたのには次の一般的要因があった。

①自然条件・気候条件が農業に不適だった。戸外で農作業ができるのは 4 月中旬～9 月中旬のうちで 125～130 日間と少ないため、安定した収穫を見込みにくかった。¹³⁾

②施肥が少なく、農業生産性が全般に低かった。主食のライ麦や小麦についてみれば、1 粒を蒔いて 3～4 粒を収穫するというのが 18 世紀～20 世紀前半の平均水準だった。この程度の収穫量では早ければ年内に食い尽くしてしまうため、わずかな天候不順が飢餓につながりやすかった。¹⁴⁾

③土地不足と過剰人口という農村の構造的な問題が 1861 年の農奴解放のあと顕在化した。農村の人口は 1870 年の 5859 万人から 1900 年の 9130 万人へと毎年 100 万人以上のテンポで、農民総数は 1929 年まで年 1.5%以上の割合で増え続けた。並行して農民家族の分割が進み、欧露部の世帯数は 1877/78 年度の 800 万戸から 1929 年の 2500 万戸に激増した。¹⁵⁾

④とくに飢饉が頻発したヴォルガ流域には特有な問題があった。そこでは農家が千戸を超える巨大な村落がめだった。そのために宅地から 50 km 余り離れた耕作地が生まれ、放置されやすかった。かわりに休閑地にソバなどが多く作付けされたり、ライ麦が同一区画地に連作されたりした。こうした輪作体系のない雑圃制などによって旱魃に弱い地域が生まれた。¹⁶⁾

(2) 1920 年代初頭の飢饉の概要

1914 年 7 月に始まった世界大戦でロシアは約 1430 万～1760 万人の兵士を前線に送り、負傷・戦死・捕虜・行方不明などで、その 3 分の 1 ほどを喪失した。兵士と民間人の死亡数は 365 万人にのぼった。¹⁷⁾ 民衆の不満は高揚し、300 年余り続いたロマノフ朝は 1917 年 2 月に崩壊した。さらに 10 月には臨時政府が瓦解し、レーニンを首班とする新政権が成立した。

同政権が最初にとった施策のひとつが大戦からの離脱だった。それによってロシアは対外的に孤立し、国内でも種々の対立を抱えることになった一方、平和を取り戻した。しかし、それは長く続かず、上記の孤立と対立などを背景に、1918年5月から内戦＝干渉戦争（最大時の1919年2月に14か国が約13万人を派兵¹⁸⁾）が始まった。兵士だけで250万～330万人という死者を出して1920年秋までにはほぼ終結した内戦では、ロシアの穀倉地帯である欧露部の南半分が前線となった。そこでは新政権とそれに敵対する側の双方が強権的に食糧を徴発したので、農民の反発をよんだ。

長期間の戦争により穀物の播種面積や家畜の頭数が減少した。1916年と1921年の全国値を比べると、播種面積は31%減り、とくに春蒔のライ麦・小麦などは4割以上の減少となった。また、家畜は平均40%減り、ヴォルガ下流域では馬と牛が半減し、豚が4分の1に減った。播種面積の縮小には、大戦が総力戦だったために農機具が減少したことも関係していた。金属製の犁の生産量は1921年に1913年比の13%まで低下した。

こうしたなか、降雨量の減少と気温の上昇が1920年春から全土で目立ち始めた。4～7月の降雨量は平年の7%以下に留まり、気温は16度から23度に、土中の温度は11度から18度に上昇した²¹⁾。秋と冬も雨が少なく、翌年も春の降雨量がわずかなまま、暑い夏が再来した。

その影響を最も強く受け、早魃が著しかったヴォルガ中・下流域やウクライナ南部²²⁾は、ロシアの重要な穀倉地帯だった。逆にいえば、穀倉地帯のうちで今回の飢饉に見舞われなかったのは中央農業地帯の一部などに限られた。そこで全国の食糧供給がそれらの地域に期待された。しかし、同地域における食糧生産量は²³⁾大戦前の半分の水準まで低下していた。

全国的な食糧不足に輪をかけたのが、第1に、食糧の搬送手段とりわけ鉄道の機能低下だった。機関車と貨物車の稼働率は1913年の86%と95%から1921年の40%と70%に下がった²⁴⁾。第2に、新政権が内戦期に採った戦時共産主義政策の中心をなしていた食糧徴発制度の廃止と食糧税への移行が1921年2月に決定され、残った農産物の自由な売買が認められようになった。その結果、

大半の住民が私的な市場に食糧を求めざるをえなくなり、食糧価格は4月から急騰し始めた。その上昇を待つ小売商の投機的な姿勢などが少ない食糧の偏在²⁵⁾を促進した。

新政権の飢饉への対応は事態の進行に遅れがちだった。1920年夏にはモスクワ県の南や南西に位置する5県で飢饉が生じ、9月21日に人民委員会議（政府に相当）はこれらの地域の飢餓住民への援助を決定し、ほぼ同時にシベリアと北カフカースでの穀物調達と搬出作業の強化を指令した。11月にはレーニンが全国的な食糧不足の進行を指摘し、12月22～29日の第8回全ロシア・ソビエト大会の論議を農業問題に集中させた。しかし、飢饉についての公式見解がロシア共産党機関紙『プラウダ』に載ったのは、それから半年後の1921年6月30日のことだった。こうした遅れは、内戦の終結に新政権が手間どったうえに、戦時共産主義的な考えが内戦後も政権内などに残っていたためである。²⁶⁾さらに、飢饉救済にとりくむ国内諸組織の間に混乱が生じていた。

これらの事情が重なり、飢饉の規模は従来を著しく上回った。上記の1921年6月末の公式見解によれば、その地理的範囲（飢饉地域）は欧露部で南北1300 km 弱、東西560 km とされた。数か月後にそれは拡大し、日本の現国土の9倍弱にあたる330万 km² となった。そこには、ヴォルガ流域とウクライナ南部にくわえ、ウラル山麓のペルミ、ヴァートカ、ウファー諸県、北カフカースのスターヴロポリ県などが入った。さらにシベリアや中央アジア部など²⁷⁾を含めると、全国74県のうちの20～34県が飢饉に襲われたことになる。

(3) 飢餓人口と死亡数

広大な飢饉地域で飢えていた住民の数は確定しておらず、従来は約2200万～3350万人の間で推計されてきた。論者により飢餓の基準が異なるうえに、時期や地域の違う資料にもとづいていたからである。たとえば、1921年7月に新政権が創設した飢餓住民救済中央委員会（通称「ポムゴール」）の公式数値は委員長のM. H. カリーニン（1875～1946年）が同年12月にあげた「2200万人以上」だった。ただし、彼自身はそれに500万人ほどを上積みした「2700

万～2800 万人」が適切だと考えていた。1922 年に国際連盟は「3003 万人」、ロシア赤十字社は「3350 万人（うち都市で 500 万人）」とみなした。20 世紀のロシア人口史を見直す近年の研究は、これまで洩れていた地域を考慮して、飢餓人口を「3500 万人（うち都市で 500 万人以下）」と推定している。²⁸⁾これは 1922 年末に成立したソ連の総人口の 4 分の 1 にあたる数値である。

14 歳までの子どもに注目すると、①ヴォルガ流域と黒海沿岸のクリミアで 3 割以上の子どもが飢餓と疫病（伝染病）で死亡したという調査、② 1921/22 年の冬にウクライナ南部で「膨大な数」の子どもが死亡し、その記録はどこにもないとする著書、③飢饉地域の大半を対象とした 1922 年 5 月の資料で 1018 [1069] 万人の子どもの 66 [68] %にあたる 673 [725] 万人が飢えていたという統計などが紹介されている。²⁹⁾また、④ 1923 年の公式統計誌に掲載された論稿によれば、1922 年 8 月にロシアの 21 県とキルギスタン、ウクライナの各 5 県の計 31 県に 1795 万人の子どもがおり、その 61 %にあたる 1100 万人が飢餓状態にあった。³⁰⁾⑤『飢餓住民救済中央委員会ビュレティン』1922 年 5-7 合併号によれば、1922 年の 23 県などの飢餓児童数は年頭までの 640 万人から 4 月の 857 万人、³¹⁾8 月の 989 万人へと増えたという。

乳幼児については、飢餓住民 2603 万人（ウクライナを除く）のうち、年齢が判明している 2013 万人の 27 %にあたる 539 万人が乳幼児だった、とするロシア赤十字社の 1922 年の統計がある。³²⁾誕生まもない数百万の生命がその存続の危機に直面していたことがわかる。

飢餓人口の確定以上に難しいのは飢饉による死亡数の推計である。一般に、近世以降の社会では栄養不良や栄養失調が直接的な死因となる餓死は例外的であり、赤痢や発疹チフスなどの疫病が飢饉時の主な死因であることが多い。³³⁾

少雨あるいは多雨と冷夏が収穫不良や飢饉に直結し、飢餓のために住民の（一人一日平均）カロリー摂取量が低下し、体力の弱ったところで翌夏の暑さにより疫病が蔓延し、死亡率を上昇させる——という関係が 1920 年代初頭のロシアの飢饉でも認められた。たとえば、ヴォルガ下流域のサラトフ県では、1920 年に収穫が不良になり、1921 年から食糧供給量が急減し、2 月の農

民のカロリー摂取量は前年同月の約7割まで低下した。さらに1922年にかけて飢餓が深刻化し、同年2月のカロリー摂取量は、平常値に回復する翌1923年2月の45%にすぎなかった。他方、サラトフ市の死亡率は1921年6月に169%（千分の一の単位「パーミル」）、1922年2～4月に147%³⁴⁾と急騰し、その大半をコレラや発疹チフスなどによる上昇分が占めていた。

飢饉と死亡のやや複雑な関係にくわえ、飢饉地域を網羅する統計の欠如から、この時期の餓死者・病死者の総数は論者によって異なる。たとえば、ロシア救済国際委員会はそれを「125万～200万人」、同委員長のF.ナンセン（1861～1930年）は「300万人」とし、1970年の米国の学位請求論文は「餓死者のみで1000万人以上」とする。他方、ロシアの最近の研究では1922年5月までの餓死者・病死者数を「約100万人」とみなす³⁵⁾。ただし、これらのいずれもが乳幼児の死亡数は特定しておらず、「飢餓と病気によって3歳未満児の90～95%と年長児〔3～7歳児〕の約3分の1が死亡した」という少し極端な記述がみられるだけである³⁶⁾。

そこで、その代わりに、飢饉時に上昇しがちな（普通）死亡率（人口千人あたりの死亡数）と、逆に急激に低下しやすい（普通）出生率（人口千人あたりの出生数）の推移をここで瞥見しておこう。

20世紀前半のロシアの死亡や出生の動向にみられる最大の特徴は、多産多死段階から少産少死段階への転換過程にあたる多産少死段階に位置したという点である。そのため、19世紀後半に50%前後と高水準にあった欧露部の出生率は、世紀転換期頃から、多少の上下を繰り返して、低下し始めた。1915～1922年に出生率は40%を割ったあと、1923～1928年に再び40%を超えた。このように戦争や飢饉などは出生率を急落させ、人口を潜在的に喪失させた。これらの情勢の影響は、世紀転換期になお30%を超えていたロシアの高い死亡率の漸減傾向を中断し、ときに再び30%以上に急騰させた点にも認められる³⁷⁾。

飢饉時には乳児死亡率（出生数千人あたりの生後1年未満の死亡数）も上昇した。ロシアのこの値は大戦前夜まで主要国のなかで異例に高く、出生児4人

のうち1人余りが誕生日を一度も迎えられずに死亡していた。1920～1922年の水準もほぼ同じで、232～251%の間にあった。それが、飢饉後には、1923年に230%を、1925年に220%を、1926年に200%を割るというように低下する。³⁸⁾

地域別の乳児死亡率については、飢饉地域の値を見出していないので、大都市の事例をみよう。モスクワ市の場合、内戦期の食糧不足から1919年に332%に急騰していた値は1921年に206%まで低下した。それが1922年には247%へ再上昇し、1923年には144%に落ち着き、1920年代後半は130%前後を推移した。ペトログラード市の場合も、水準は少し異なるものの、ほぼ同じ軌跡をたどった。両市ともに内戦と飢饉が乳児死亡率の上昇に影響していたことがわかる。³⁹⁾

飢饉は子どもの死とともに、その浮浪化を招いた。浮浪児数の確定も難しいので、ボールの著書からロシアの概数を拾うと、1921年に450万人、1922年に500万～750万人、1923年に100万～400万人、1924年春に100万人以上となる。⁴⁰⁾ 1927年に総数の15%を3～7歳児が占めていた⁴¹⁾ので、この比率を単純に当てはめれば、飢饉時には数十万ないし百万人以上の幼児が浮浪状態にあったことになる。

2 飢饉対策としての配給・給食・疎開と保育施設の実態

(1) 配給と給食の実施

飢饉対策で優先されたのは食糧の配給と（公共）食堂や各種施設での給食の実施である。

サラトフ県の場合、1921年に配給を受けた住民は人口の数%に留まった。それが翌年1月に10%を超え、4月に24%、5月に44%と急激に上昇し、6～8月は56～64%と過半数に達した。その後、この比率（受給比）は9月に34%になり、10月以降は数%まで低下した。183ページでふれた1922年8月のロシア、キルギスタン、ウクライナ31県の統計で受給比をみると、成人の56.5%に対して子どもは42.6%と低かった。ただし、標準的な配給量は成人の706

キロカロリーに対して、自前で食糧を得にくい子どもは877キロカロリーと高めに設定されていた。配給の主な手段は列車や船で運ばれたパック詰め of 食糧で、一例をあげれば、中味は小麦粉・米・茶・脂肪製品・砂糖・缶ミルク、重さは53kg、経費は7.75ドルだった。これで3人の1か月分の食糧とみなされた。⁴²⁾

つぎに、保育施設を含む児童施設における受給比をみると、1921年10月にヴォローネシ県（中央農業地帯）で12.5%、ヴォチャーク自治洲（ヴァートカ県の南東側に隣接。現ウドムルト共和国）で0.7%、ペトログラード県で45.2%、12月にトヴェーリ県（中央工業地帯）で54.0%、ヤロスラヴリ県（同上）で27.0%というように、総じて低いうえに、県によって相当な違いがあった。受給比の短期間の推移に注目すると、ヴラヂーミル県（同上）では⁴³⁾1921年4月の22%から5月の12%に低下していた。

配給と並んで、食堂や施設で食事が出された。食堂は1922年の初頭に1.3万か所で一日に250万食を、7月に3万か所で1250万食を供給した。農村で臨時の食堂になったのは閉鎖された学校が多く、粥・牛乳・砂糖・ココアなどが提供された。それでも食堂を⁴⁴⁾実際に利用できたのは、子どもについてみれば、対象者の1割に留まった。

前述のように、飢饉の発生と重なる1921年春に戦時共産主義政策が放棄され、市場経済化の原理を部分的に導入する新経済政策の採用が決定された。その結果、国家予算に占める教育予算（保育予算を含む）の比率は1920年の9.4%から1921年の2.2%、1922年の2.9%に急落した。⁴⁵⁾そこで各種の教育施設・保育施設の維持は主に地方予算に委ねられた。

教育予算削減の影響は保育施設の給食にもおよんだ。教育人民委員部で保育行政を担当していた保育部は1921年10月からの1年間の活動報告において、「国家予算で給食を実施する対象から保育施設が1922年末までに除外されるので、諸機関・企業から支援を受ける必要がある」と指摘した。⁴⁶⁾しかし、1923年春にヴァートカ県国民教育部（教育委員会に相当）は、この除外の結果、「貧しい人々は子どもを登園させたがらず、登園率〔園児総数に対する日々の

登園児数の割合〕が低下した」と保育部に報告し、父母からみた保育施設の存在意義の相当部分を給食が占めていた実態を明らかにした。⁴⁷⁾

以上の事情から、配給活動などで重要な役割を果たしたのは、諸外国の政府や赤十字国際委員会などだった。のちの大統領 H. C. フーバー（1874～1964 年）の名を冠した米国救援局（ARA）の活動はとくに積極的で、ウクライナ以外の地域で 1922 年 7 月と 8 月に国外組織が飢餓児童に提供した 360 万人分と 420 万人分の配給の 8 割を担った。また、それに先だつ 1921 年 2 月にロシア救済国際委員会のナンセン委員長は「本年中に 1900 万人が餓死に直面し、国外からの援助なしには 1000 万～1200 万人が確実に餓死する」という警告を諸国に発して、救済活動に精力的にとりくんだ。その功績で彼は翌年にノーベル平和賞を受けた。⁴⁸⁾

これらの活動は国家間の人道支援という側面をもつとともに、政治上・経済上の判断にもとづいてもいた。たとえばフーバーは、「食糧が戦争の勝利を決定的なものとする」と考え、大戦で疲弊したヨーロッパ諸国の救済活動にとりくみ、その延長としてロシアでの飢饉救済に力を割いた。⁴⁹⁾それはまた、米国人捕虜の釈放と大戦後に価格の下落した米国の穀物との交換をねらっていた。他方、干渉戦争で敗北したものの「ロシア革命の輸出」は阻止できたヨーロッパ諸国は、1914 年からの長期間の戦争状態で混乱した自国と国際社会の安定を志向し、「その一環としての旧ロシア帝国地域の安定化」を求めた。⁵⁰⁾それを実現し、ロシアとの関係を改善するうえで飢饉救済の活動は好機と欧米諸国の目に映った。

(2) 保育施設の削減と児童ホームの内情

浮浪児を収容し、衣食住とりわけ食を提供するために児童ホームが入所児で溢れかえる一方、新経済政策の影響で保育施設は続々と閉鎖されたり、物資に事欠いたりするようになった。

ヴァートカ県国民教育部は 1921 年の保育施設の実情をつぎのように保育部に報告している。⁵¹⁾

大半の保育施設が簡易なもので、園児向けの物資が配給されず、園生活が順調に進んでいないため、登園率は半減している。専門教育を受けた保育者はおらず、課業の半分以上が実施されていない。フレーベルやモンテッソーリの保育思想が2郡で実践されている一方、多くの地方では課業が神の法（祈りなど）に代わっている。楽器などの備品がほとんどなく、園児は野原に座っているだけである。建物は園舎として不適切で、何とか使える場合、その大半は別の施設に利用されている。暖房問題も急を要する。子どもには靴も衣服もなく、恐ろしい飢饉が襲った現在、保育施設への配給は止まったままである。

1922年3月の保育部副部長の報告によれば、ヴォルガ流域とウラル地方を中心に1157園の保育施設が閉鎖され、園児4万5610人が他県に疎開させられた。⁵²⁾

全国の保育施設数（と園児数）は1921年（以下、年頭の値）に4254園（22.1万人）で頂点に達したあと、1922年に3056園（15.8万人）、1923年に1197園（6万人弱）と減少し、1925年初頭には1921年の2割になった。とくに農村では1921年に2210園（10.7万人）だった保育施設数（と園児数）が1922年に1425園（7.1万人）、1923年に297園（1.5万人）と急減した。

他方、全国の児童ホーム数（と入所児数）は1921年に4052園（20万人弱）、1922年に6412園（36.1万人）、1923年に5314園（31.2万人）と推移した。⁵³⁾ 飢饉地域に位置する14県に限れば、1921年には年頭の1356園（6.6万人）から年末の2292園（21.6万人）へと1.7倍（3.3倍）になった。⁵⁴⁾

飢饉地域において施設数の倍のテンポで入所児数が増加した結果、児童ホームの衛生状態は急速に悪化した。最も厳しい飢饉にみまわれたヴォルガ下流域のサマーラ県のある児童ホームを訪ねた米国人記者は、その内情をつぎのように報告している。⁵⁵⁾

人々は、親を失ったり、親に捨てられたりした哀れな子どもを拾い上げ、このホームに連れてきた。私が訪問した施設では、病気にかかっているのが明らかな子どもや死にかかっている子どもを「より健康な」子ども

から分離するようにしていた。「健康な」子どもといっても、彼らはあちらこちらに物憂げに座りこんでおり、300～400人は埃っぽい庭におかれていた。子どもたちはあまりに弱っていて放心状態にあり、悲しみにとらわれていたので、動かしたり、世話したりできなかったからである。大半の子どもは空腹を通り越した状態にあった。マッチ棒よりも細い指をした7歳の男の子に私がチョコレートやビスケットを差し出すと、彼は声もなく首を横に振って、それを拒んだ。ホーム内はひどいもので、私がこれまで見てきた施設のうちで最も不健全な雰囲気の中、病気の種類も程度も異なる子どもがひとまとめに扱われていた。1人の保母と3人の少女がこの「ペスト・ハウス」の係だった。しかし、彼女らにできることは何もなく、「食べ物も、お金も、スープも、薬もない」と疲れはてた様子で語った。そこには約400人の子どもがいた。だが、彼女らはその正確な数を知らなかった。しかも、さらに毎日およそ100人以上の子どもがこのホームに到着し、同じ数の子どもが毎日そこで死んでいた。

サマラからヴォルガ川を数百キロメートルさかのぼったカザン県の児童ホームを訪問した別の米国人も、上記の記者と同様な印象を抱いた。⁵⁶⁾

このように多くの児童ホームは定員をかなり超える入所児を抱え、医薬品や寝具類に欠け、正規の医師や看護婦は少なく、石鹸もわずかで、暖房設備や厨房があるのはまれで、重病の入所児を隔離しておく部屋もなかった。その結果、児童ホームは「伝染病の発生地」となり、「死の施設」とよばれた。実際、⁵⁷⁾入所児の死亡率はしばしば9割以上に達した。

(3) 疎開の実施

子どもを児童ホームに収容する政策から飢饉地域の外に疎開させる政策への比重の転換が1921年中頃になされた。月間の疎開児数は9月と10月の各1.4万人から11月と12月の各2.8万人に倍増し、その総計は翌年の夏ないし年末までに15万～25万人にのぼった。疎開先はシベリア、中央アジア、北カフ⁵⁸⁾カース、ウクライナ北部、ペトログラードなどだった。

ただし、多くの疎開はあまり準備されたものでなかった。たとえば、1921年11月に子ども委員会は飢餓住民救済委員会や国際赤十字と連携して、ヴォルガ流域の1600人の子どもをチェコスロバキアに疎開させるため、まずモスクワに移したところ、そこには十分な宿舎が確保されていなかった。さらに、ようやく目的地に着いた子どもの教育に新政権の敵対勢力が関わっていることが翌年の秋にわかると、子ども委員会は疎開児をヴォルガに戻すことにした。⁵⁹⁾ 場当たり的な政策が事態をさらに混乱させた。

幼児の疎開に保育部は反対した。その理由を、1921年8月17日の保育部参与会で、初代部長Д. А. ラズールキナ（1884～1974年）がつぎのように述べている。⁶⁰⁾

当部では各課が飢饉対策の計画をもち、通達や規程を出して、地方の指導に当たっている。今後は、飢饉地域などで働くインストラクター⁶¹⁾に通知を送り、飢餓問題にとりくませよう。飢饉地域の保育施設を閉園し、非飢饉地域に幼児を疎開させるのではなく、逆に施設を維持し、たとえ保育者が一人しかいない場合でも給食を出せるようにすべきだ。そのために非飢饉地域から飢饉地域へ保育者を一時的に派遣することも検討したい。

これは、「幼児が疎開すると、その地域の保育施設の閉鎖につながるので、疎開には反対だ」という保育行政の論理による主張であるとともに、「大戦・内戦の疎開時に続出した子どもの餓死・病死や親子離散の悲劇を繰り返させない」という決意の表われでもあった。そこで教育人民委員部は「幼児を疎開させてはならない」と飢饉地域⁶²⁾に指示した。

しかし、それは守られず、幼児を含む子どもの1～2割が疎開中に死亡した。この高い死亡率は、ときに400 km以上もの長距離をすし詰め列車や船で、満足に食事をとることもできないままに移動する心身の負担からだけでなく、病気になった疎開者が狭い室内に長時間ともにいるために疫病が拡大したからでもあった。移動途中に生き延び、目的地に着いた者のなかにも患者はおり、それが疎開先に疫病をもたらしした。そのため、疎開者の受け入れを渋るところもあった。子どもを対象とした大規模な疎開は最終的に1924年に中止さ

⁶³⁾
れる。

(4) カニバリズム (人肉喰い)

最後に、以上の諸施策で救われなかった子どものうちで最も深刻な事例を紹介しよう。

飢饉地域のバズルク市で救済活動にとりくんでいたある人物は 1921/22 年の冬につぎの電報を発信した。⁶⁴⁾

当市では凍りついた子どもの死体が路上に文字どおりゴロゴロしており、3000 人以上の赤ちゃんが捨てられている。われわれは 3 万 8000 人の子どもを至急に救い出す必要がある。さもないと町は捨て子でいっぱいになる。他方、村では乳の出なくなった母親や疲れ果てた父親の腕に乳幼児が抱かれたまま亡くなっている。

また、「子どもが蠅のようにバタバタと死んでいた」というサマーラ県など⁶⁵⁾では同じ冬につぎの事態が観察された。⁶⁶⁾

何よりも悲惨なのは飢餓の苦しみだった。まず頬が落ち込み、顎がせりだし、眼が濁り、しだいに手と足、顔が痛みをともなって腫れ始め、さらに全身に浮腫みがくると、もう死が近づいていた。飢えに極端に苦しむ者は死体さえ食べた。死んだ夫の肉体が内臓まで取り出され、妻はそのすべてを食った。この女の話では、夫自身が生前に墓場から死体を運び出して食べていた。老婆が夫を殺して食し、若い母親が親戚の子どもを殺して食したという事実もあった。人肉喰いが露見した者は濁った眼と死にかけた全身腫れあがった姿で町に連行された。その大半は、年頃の娘から老女にいたる女性だった。

こうした行為の最初の標的になったのが子ども、とくに幼児だったことは、これもまたロシア史上で最大級となった 1932～1933 年の飢饉（死者数は 720 万～1080 万人）⁶⁷⁾の際の人肉喰いに関する警察記録で、対象者の年齢が 2～8 歳に集中している事例から推測できよう。⁶⁸⁾

実際、1920 年代初頭の飢饉時にも教育人民委員部は「飢えに苦しむ子ども

(192)

たちが互いにかじりあうので、母親が子ども同士を離して縛りつけておかなければならない」という報告を受けていた。また、バシキール自治共和国の指導部は「人肉喰いについて」という特別決定を1922年4月に採択して、死体を食⁶⁹⁾べることや人肉を売り買いすることの掃をよびかける必要性に迫られていた。⁷⁰⁾

カニバリズム以外にも、飢えで衰弱していく子どもを見かねて殺した母親や、ヴォルガ川に赤ちゃんを投げ入れた母親、一家ぐるみの焼身自殺などの事例が飢饉地域では希でな⁷¹⁾かった。

おわりに

最後に、本稿で明らかになった点を要約しておこう。

ロシアの厳しい自然条件や農業生産性の低さ、農村人口の急増などを遠因として、また1914年後半からの長期間の戦争を背景に、さらに1920年春に始まった旱魃が近因となって、同年の夏に一部の県で飢饉が発生した。翌年になると飢饉の規模は拡大し、最大時の1921/22年の冬には、ヴォルガ中・下流域、ウクライナ南部、ウラル山麓、北カフカースといった欧露部の東・南東・南の地域の330万km²にくわえて、シベリアや中央アジア部までを飢饉は呑みこみ、その範囲は全国74県のうち20～34県におよんだ。

これらの飢饉地域における飢餓者の総数はこれまで2200万～3350万人の間で推計されてきた。だが、近年の研究ではソ連の総人口の4分の1にあたる3500万人とみなされている。その3分の1ほどの1100万人が14歳までの子どもであり、7歳までの乳幼児はロシアだけで少なくとも539万人を数えた。

飢餓住民は1921年にカロリー摂取量が低下し、体力の弱ったところで翌年の夏の暑さで蔓延した疫病のために多くが死亡し、一部が飢餓のために亡くなった。病死者・餓死者数の従来の推計は125万～1000万人と開きが大きく、上記の近年の研究は約100万人としている。そのうち子どもや乳幼児の数は未確定であり、確認できるのは、1920～1922年に欧露部の死亡率と乳児死亡率が再上昇し、出生率が急激に低下するほど多くの生命が失われたり、誕生しな

かったりしたという点である。

1920 年末から 1921 年春にかけて内戦がほぼ終結し、存亡の危機を乗り越えた新政権は、飢饉の発生を公認した 6 月末の直後から飢餓救済の活動に本格的にとり組み始めた。他方、対ソ干渉戦争に派兵した日欧米の諸国とくに欧米諸国は、ロシアとの関係改善の好機という判断などから、この活動に積極的な姿勢をとった。

ロシア内外の諸組織が救済活動で優先したのは食糧の配給と公共食堂や各種施設での給食の実施だった。しかし、配給が届いたのは 1922 年 8 月の時点で飢餓人口の半数ほどだった。また、同年 7 月に 3 万か所まで増大した公共食堂では一日に 1250 万食が提供されたものの、その恩恵を受けられた飢餓児童は全体の 1 割にすぎなかった。

1921 年春に市場経済化の原理を部分的に導入する新経済政策の採用が決定された結果、国家予算に占める教育予算の比率が急落し、保育施設は 1921 年から 1923 年にかけて 7 割以上も削減された。他方、内戦と飢饉により 1921～1922 年に生まれた 500 万人前後の浮浪児を受け入れる児童ホームは同じ期間に 1.6 倍に増えた。だが、入所児数がそれ以上に増加したことなどから、児童ホームでは大半の入所児が死亡するという事態が頻繁にみられた。

1921 年中頃から飢饉地域の子どもの非飢饉地域への疎開が活発になり、翌年の夏ないし年末までに 15 万～25 万人の子どもが移送された。飢饉地域の広さから移動距離は数百キロメートルにもなり、途中で 1～2 割の子どもが死亡した。また、疎開の結果、飢饉地域で流行していた疫病が疎開先に広まることになった。子どもの疎開は 1924 年に中止された。

飢饉地域にいるのも、そこから移動するのも「地獄」という状態が 2 年ほど続いた。その最悪の結果は人肉喰いとなって現われ、幼児はその犠牲となりやすかった。しかも、つぎの大きな飢饉が 1930 年代前半にロシアを襲うまでの間の 1924～1925 年や 1928 年～1929 年にも各地の農村では飢饉の様相を呈したり、飢饉と呼ばれたりするような状況にあっ⁷²⁾た。

【謝辞】

本稿で使用した文献の入手にあたり、梶川伸一, A. M. Ball, S. G. Wheatcroft らの諸氏から特段の配慮をいただきました／本稿は日本教育学会第 63 回大会 (2004 年 8 月 26 日, 北海学園大学) での同名の発表 (同大会発表要旨集録, 118~119 頁) 時に配布した未定稿とほぼ同文です。発表の際にいただいた貴重な指摘が本稿にあまり反映されていないのは筆者の個人的な事情のためです。

【註】

- 1) W.Z. Goldman, *Women, the State and Revolution* (Cambridge, 1993), p. 70. 以下, 文献の副題などは基本的に省略する。
- 2) 20 世紀中頃までロシアの就学年齢は 8 歳だったので, 本稿における乳幼児は 8 歳未満児をさす。
- 3) 詳しくは菊池勇夫『飢饉』(集英社新書, 2000 年)などを参照。日本では生活保護を受けられず餓死する人が年間に少なくとも 60 人ほどいるという (「生活保護 餓死の現場」TBS「報道特集」2003 年 12 月 28 日放送)。
- 4) П. Канторович и др., Дошкольная работа за 10 лет, 《Вестник просвещения》, 1927, No. 11, с. 16. 以下, 引用の多くは要約である。
- 5) М. М. Виленская (ред.), *Справочная книга по дошкольному воспитанию*, М.-Л., 1928, с. 116-117.
- 6) Г. А. Медведева, *Становление и развитие общественного дошкольного воспитания в Российской Федерации с 1917 до 1932 гг.*, М., 1992; Л. Н. Литвин, *Становление и развитие системы общественного дошкольного воспитания в РСФСР, 1917-1940 гг.*, СПб., 1993; Л. М. Волобуева, *Становление и развитие общественного дошкольного воспитания в Москве*, М., 1994; L. Kirschenbaum, *Small Comrades* (N. Y., London, 2001. Ph. D. diss., UCB, 1993 による), and so on.
- 7) 福田誠治「ソビエト社会主義革命と浮浪児」『季刊 教育運動研究』第 11 号 (1980 年) 73~85 頁; 桑原清「ソビエト教育学における浮浪児問題」竹田正直編『教育改革と子どもの全面発達』(ナウカ社, 1987 年) 168~196 頁。前者が

- 紹介したのは V. Zenzinov (A. Platt [tr.]), *Deserted* (London, 1931) である。その原著は 1929 年にパリで刊行されたもので、D.L. Ransel (ed.), *The Family in the Imperial Russia* (Urbana, Chicago, London, 1978), p. 333 に解題がある。
- 8) В. А. Арнауттов (сост.), *Голод и дети на Украине*, Харьков, 1922; Представительство Российского общества Красного креста в Америке, *Голод, 1921–1992*, Нью-Йорк [предсл., 1992]; Самарская губ. комиссии помощи голодающим, *Книга о голоде*, Самара, 1992; Центральная комиссия помощи голодающим, *Итоги борьбы с голодом в 1921–1922 г.г.*, М., 1922; В. Яроцкий, *Профсоюзы в борьбе с голодом*, М., 1922; League of Nations, *Report on Economic Conditions in Russia* [Geneva, 1922]; 『露西亞飢饉の真相』(黒龍会本部, 1922 年。未見); ЦК Последгол. ВЦИК, *После голода*, М., 1922–1923; *Год борьбы с голодом, 1921–1922*, Харьков, 1923; Л. Ефременко (ред.), *Год борьбы с голодом в Дагестане*, Махач-Кала, 1923; РСФСР. Центральная комиссия помощи голодающим, *Итоги последгол*, М., 1923; H. H. Fisher, *The Famine in Soviet Russia, 1919–1923* (N. Y., 1927), and so on.
 - 9) C. M. Edmondson, *Soviet Famine Relief Measures, 1921–1923* (Ph. D. diss., Florida State Univ., 1970). See idem, “Politics of Hunger,” *Soviet Studies*, Vol. 29, No. 4 (1977), pp. 506–518.
 - 10) О. М. Мовчан и др. (ред.), *Голод 1921–1923 годов на Украине*, Киев, 1993; A. M. Ball, *And Now My Soul Is Hardened* (Berkeley, Los Angeles, London, 1994); S. G. Wheatcroft, “The Great Leap Upwards,” *Slavic Review*, Vol. 58, No. 1 (1999), pp. 27–60; 梶川伸一「幻想のロシア革命」(同氏から引用の許可を得た。この未定稿は同『幻想の革命』京都大学学術出版会, 2004 年の第 7 章に収められているが, 本稿では未定稿から引く)。
 - 11) И. Б. Орлов, Между «Царь-голодом» и «Товарищем Урожаем»; Т. М. Смирнова, Дети Советской России, в кн. *Социальная история (Ежегодник, 2001/2002)*. М., 2004, с. 467–526.
 - 12) A. K. セン (黒崎卓ほか訳)『貧困と飢饉』(岩波書店, 2000 年)など。本文中の引用は同書の訳者解説(281～305 頁)から。彼の理論を踏まえた飢饉研究には脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治』(名古屋大学出版会, 2002 年)などがあり, また同理論の教育学的分析として宮寺晃夫『教育の分配論』(勁草書房, 2006 年)などが, 法哲学的考察として河見誠『現代社会と法原理』(成文堂, 2002 年)第 5 章などがある。
 - 13) В. В. Кондрашин, Голод в крестьянском менталитете, в кн. В. П. Данилов и др. (ред.), *Менталитет и аграрное развитие России*, М., 1996, с. 115–119.
 - 14) 土肥恒之『「死せる魂」の社会史』(日本エディタースクール出版部, 1989 年)

- 116～122 頁；鈴木健夫『帝政ロシアの共同体と農民』（早稲田大学出版部，1990 年）292 頁；奥田央『ヴォルガの革命』（東京大学出版会，1996 年）586 頁；梶川・前掲論文，57 頁。
- 15) 佐藤芳行「ロシアにおける人口と土地不足問題」『(中部大学) 国際研究』第 10 号（1994 年）74，79 頁；同「工業化とクスターリ」『中部大学国際関係学部紀要』第 16 号（1996 年）4 頁；奥田・前掲，412～415 頁。
- 16) 奥田央『コルホーズの成立過程』（岩波書店，1990 年）209～215 頁。
- 17) 田中陽兒ほか編『世界歴史大系 ロシア史』第 3 巻（山川出版社，1997 年）23 頁（和田春樹・執筆）；В.Б. Жиромская и др. (ред.), *Население России в XX веке*, т. 1, М., 2000, с. 78-79.
- 18) 川端香男里ほか監修『ロシアを知る事典』新版（平凡社，2004 年）448 頁（藤本和貴夫・執筆）。
- 19) Жиромская и др. (ред.), указ. соч., с. 97.
- 20) 梶川伸一『ボリシェヴィキ権力とロシア農民』（ミネルヴァ書房，1998 年）614 頁。欧露部の耕作面積は 1920/21 年度に 1913/14 年度比で 47%まで縮小した (Fisher, *op. cit.*, p. 489).
- 21) Edmondson, *op. cit.*, 1970, pp. 41, 43.
- 22) B. M. Patenaude, *Big Show in Bololand* (Stanford: CA, 2002), pp. 26-27.
- 23) League of Nations, *op. cit.*, p. 3; Fisher, *op. cit.*, pp. 504-505; Edmondson, *op. cit.*, 1970, p. 44.
- 24) Fisher, *op. cit.*, p. 493.
- 25) S. G. Wheatcroft, "Famine and Epidemic Crises in Russia, 1918-1922," *Annales de démographie historique*, 1983, p. 346; idem, "Famine and Food Consumption Records in Early Soviet History, 1917-25," in C. Geissler et al. (eds.), *Food, Diet and Economic Change Past and Present* (Leicester, London, N. Y., 1993), p. 159; A. Bobroff-Hajal, *Working Women in Russia under the Hunger Tsars* (Brooklyn: NY, 1994), pp. 15-16 ; 田中ほか編・前掲，102～103 頁（石井規衛・執筆）。
- 26) Edmondson, *op. cit.*, 1970, ch. 3-4 ; 田中ほか編・前掲，94～96 頁（石井・執筆）；梶川・前掲論文，3 頁。
- 27) League of Nations, *op. cit.*, pp. 3, 28; Представительство Российского общества……, указ. соч., с. 31; Fisher, *op. cit.*, pp. 504-505; Goldman, *op. cit.*, p. 67. 本文中の面積は 20 県のそれである。
- 28) Представительство Российского общества……, указ. соч., с. 32; League of Nations, *op. cit.*, p. 28; Жиромская и др. (ред.), указ. соч., с. 130-131.
- 29) Ball, *op. cit.*, p. 205. [] は Edmondson, *op. cit.*, 1970, p. 164 から。

- 30) К. Бухман, Голод 1921 года и деятельность иностранных организаций, 《Вестник статистики》1923, No. 4/6, с. 94. 成人について同じ数値をあげると, 2440.6 万人, 53%, 1289.5 万人となる。なお, 最新の研究は, 1997 年の歴史学博士候補請求論文を典拠に, 飢饉地域を「6 共和国, 5 州, 1 労働コミュニティ, 32 県 (うちロシアで 22 県, ウクライナ, キルギスタンで各 5 県)」とする (Орлов, указ. соч.)。
- 31) Там же, с. 467-468 から再引。
- 32) Представительство Российского общества……, указ. соч., с. 31-32.
- 33) 見市雅俊「栄養・伝染病・近代化」『社会経済史学』第 53 巻第 4 号 (1987 年) 549 頁; 日本人口学会編『人口大事典』(倍風館, 2002 年) 736 頁 (見市・執筆)。
- 34) Wheatcroft, *op. cit.*, 1983, pp. 339-346; idem, “Soviet Statistics of Nutrition and Mortality during Times of Famine, 1917-1922 and 1931-1933,” *Cahiers du monde russe*, Vol. 38, No. 4 (1997), p. 531. 19 世紀第 4 四半世紀から年間 10 万人前後の水準にあった全国のチフス患者数が 100 万人を超えるのは 1919, 1920, 1922 年だけである (K. D. Patterson, “Typhus and Its Control in Russia, 1870-1940,” *Medical History*, Vol. 37, No. 4, 1993, p. 367).
- 35) League of Nations, *op. cit.*, p. 1; Edmondson, *op. cit.*, 1970, p. ii; Жиромская и др. (ред.), указ. соч., с. 133.
- 36) Goldman, *loc. cit.*
- 37) 拙稿「20 世紀前半のロシアにおける人口転換の特徴」『西洋史学論集』第 40 号 (2002 年) 63~86 頁; 同「19 世紀後半~20 世紀前半のロシアにおける人口再生産行動の特徴」同上, 第 41 号 (2003 年) 63~85 頁を参照。
- 38) 同「19 世紀後半~20 世紀前半の欧露部における乳幼児死亡率の変動とその諸因」『ロシア史研究』第 73 号 (2003 年) 5 頁を参照。
- 39) РФСФР. ЦСУ. Петроградский губернский отдел статистики, *Статистический сборник по Петрограде и Петроградской губернии*, П., 1922, с. 15; П. И. Куркин и др., *Естественное движение населения г. Москвы и Московской губернии*, М., 1927, с. 23-24; Ч. Уипль и др., *Основы демографической и санитарной статистики*, М., 1929, с. 608.
- 40) Ball, *op. cit.*, pp. 16, 211-212.
- 41) Zenzinov, *op. cit.*, p. 95.
- 42) Бухман, указ. соч.; Wheatcroft, *op. cit.*, 1983, p. 345; Patenaude, *op. cit.*, pp. 91-95. 子どもの受給比については, ①ヴォルガ下流域のツァーリーツィン県で 1921 年に 19% ([РСФСР. Народный Комиссариат по Продовольствию], *Год борьбы*

- с голодом, М. [1922], с. 20), ②1922 年の平均値が 20% (Goldman, *op. cit.*, p. 70), ③同年 5 月の平均値が 56% (Ball, *op. cit.*, p. 205) といった記述もある。
- 43) Смирнова, указ. соч., с. 500-501. 他方, 子ども, とりわけ孤児の食糧に最大限の配慮を払ったのがツァーリーツィン, トヴェーリ, トームスクなどの諸県である (там же)。
 - 44) Goldman, *loc. cit.*; Жиromская и др. (ред.), указ. соч., с. 132; Patenaude, *op. cit.*, p. 88. 飢餓児童を救う別の方法である養子縁組は, 「旧態依然たる家族や母親でなく新しい国家が子どもにとって最良の保護者である」という革命直後の法律家らの考えを反映して, 1918 年の家族法で禁止されていた (W. Z. Goldman, *The 'Withering Away' and the Resurrection of the Soviet Family*, Ph. D. diss., University of Pennsylvania, 1987, pp. 83-89)。
 - 45) Fitzpatrick, *op. cit.*, pp. 291-292.
 - 46) ГАРФ [ロシア連邦国立公文書館], ф. А-1575, оп. 7, д. 32, л. 144.
 - 47) ГАРФ, ф. А-1575, оп. 7, д. 21, л. 5(13).
 - 48) Представительство Российского общества……, указ. соч., с. 64; Fitzpatrick, *loc. cit.*; B. M. Weissman, *Herbert Hoover and Famine Relief to Soviet Russia, 1921-1923* (Stanford: CA, 1974), p. 6; Ball, *op. cit.*, pp. 106-107; M. Haynes et al., *A Century of State Murder?* (London, Sterling: VA, 2003), p. 57.
 - 49) Patenaude, *op. cit.*, p. 29.
 - 50) 田中ほか編・前掲, 86 頁 (石井・執筆)。
 - 51) ГАРФ, ф. А-1575, оп. 7, д. 36, л. 1.
 - 52) ГАРФ, ф. А-1575, оп. 1, д. 717, лл. 69, 165-165об. (137-137об.).
 - 53) *Труды ЦСУ СССР*, т. 28, вып. 1, М., 1926, отдел 1, с. 40, отдел 2, с. 4-8, 12, 16, 20, 24, 28, 30, 32. 拙稿「1920 年代初頭～中葉のロシアにおける保育と女性労働に対する『市場経済化』の影響」『長崎大学教育学部紀要－教育科学－』第 66 号 (2004 年) 73～98 頁を参照。
 - 54) Ball, *op. cit.*, p. 114.
 - 55) W. Duranty, *I Write as I Please* (N. Y., 1935), p. 131. 類似の状況は C. E. Bechhofer, *Through Starving Russia* (London, 1921), pp. 39-40 などにも記録されている。
 - 56) P. Gibbs, *Since Then* (N. Y., 1930), pp. 345-346.
 - 57) Edmondson, *op. cit.*, 1970, pp. 169-170; 桑原・前掲, 173 頁。
 - 58) Edmondson, *op. cit.*, 1970, p. 164; Goldman, *op. cit.*, 1993, p. 69; Ball, *op. cit.*, p. 100. 成人を含めると, 飢饉時に約 100 万人が疎開した (Жиromская и др. [ред.], указ. соч., с. 133)。
 - 59) ヴォルガ流域のドイツ人自治洲における子どもの疎開については, 鈴木建夫

- 「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘」奥田央編『20 世紀ロシア農民史』（社会評論社，2006 年）277～278 頁を参照。См.: Арнауты (сост.), указ. соч., с. 10-19.
- 60) ГАРФ, ф. А-1575, оп. 7, д. 66, л. 31.
- 61) インストラクターは，保育部や地方の保育課と保育施設や保育者との間をとり結び，主に保育内容・方法上の，副次的に施設の運営・管理に関する指導・助言などを行なった（РСФСР. НКП. Дошкольный отдел[сост.], *Справочник по дошкольному воспитанию*, М., 1919, с. 12).
- 62) Ball, *op. cit.*, p. 247.
- 63) Представительство Российского общества……, указ. соч., с. 64; Edmondson, *op. cit.*, 1970, p. 165; Wheatcroft, *op. cit.*, 1983, p. 329; A. Ball, “The Roots of *Besprizornost*’ in Soviet Russia’s First Decade,” *Slavic Review*, Vol. 51, No. 2 (1992), p. 251; idem, *op. cit.*, 1994, p. 106; Goldman, *op. cit.*, 1993, p. 69.
- 64) *Ibid*, p. 67.
- 65) Patenaude, *op. cit.*, p. 59.
- 66) И. Т. Стрельцов, *В центре голода, 1921-1922 г.*, М. - Самара, 1931 с. 28; (訳文は奥田・前掲, 1996 年, 300 頁をもとにした)。
- 67) Жиромская и др. (ред.), указ. соч., с. 276.
- 68) 奥田・前掲, 1996 年, 622～626 頁。См.: Арнауты (сост.), указ. соч., с. 36-38.
- 69) Goldman, *loc. cit.*
- 70) Орлов, указ. соч., 484.
- 71) Bechhofer, *op. cit.*, p. 44. これはカザン県の事例である。
- 72) 奥田央「農村におけるネップの終焉」同編・前掲, 26 ページ。